

中秋節を過ぎると、陝北はめっきり秋の装いに変わります。乾ききった黄色い土埃の舞う村々には、一年に一度の雨季が訪れます。稗もたわわに実り始め、あとは秋雨に耐えて赤く色づくのを待つばかり。雨降りの午後、女性たちは家にこもり、オンドルの上に腰を落ち着けて、布靴づくりなどの針仕事に精を出します。私が調査している剪紙(切り紙)も、涼しくなったこの時期、刺繍やパッチワークの型紙としてちよくちよく作られます。短い秋が終わり、正月準備が始まれば、本格的な剪紙シーズンの到来です。そこで今回は一足先に、陝北の剪紙の世界へご案内しましょう。

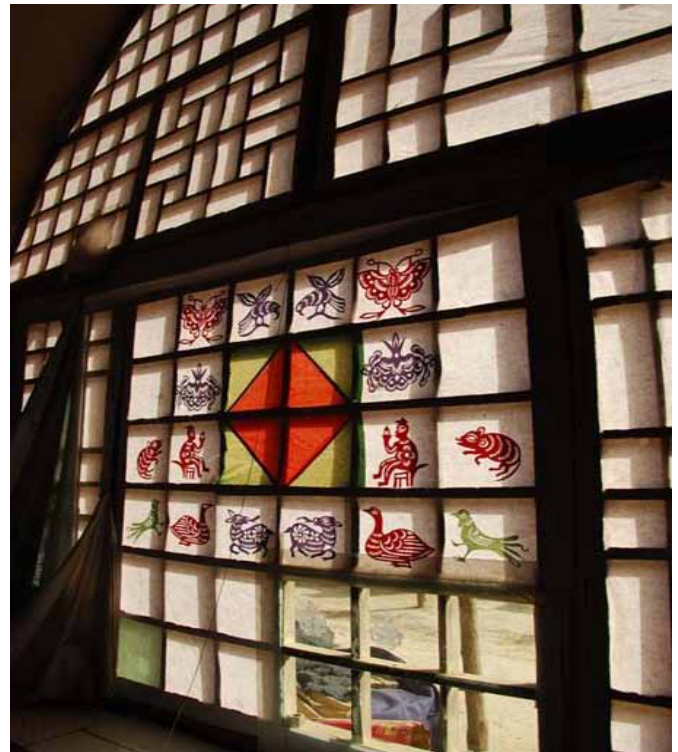
### ヤオトン 窯洞を彩る窓花

大地に深く刻み込まれた皺のように、迫立つ山谷が無数に走る黄土高原。人々はこの自然環境を生かして、太古の昔から山肌に掘り込んだ横穴式の住居を棲み家としてきました。陝北で剪紙といえば、第一にこの窯洞チュアンホワと呼ばれる伝統住居の、窓の障子紙に貼られる切り紙細工「窓花」を指します。大地に包み込まれたドーム状の窯洞空間に足を踏み入れると、本当の窓花の姿に出会えます。構造上、窯洞の唯一の採光部は入口面に配された格子窓。窓からひとたび太陽が差し込むと、薄暗い家の中に、窓花が赤みを帯びた光の影を落とします。その光景はまさに、ステンドグラスや影絵のような幻想的な美しさ。

陝北農村では「窓花を貼らないと子供の目が見えなくなる」と言われ、特に子をもつ家には必ず窓花を貼る風習があります。これは、外光を採り込む窓が窯洞の眼とされ、窓花を目に映るもの(こと)になぞらえてのこと。この他、「窓花ティエンホワは“天花”(天然痘)をとり去る」という言い伝えにも、視覚的、聴覚的なイメージの重ね合わせが見てとれます。

今でこそ、「民間芸術作品」として販売・流通されている剪紙ですが、陝北での用途は本来、春節やハレの日に殺風景な窯洞に彩りを与える装飾品です。剪紙は農閑期の女性たちの家事を兼ねた楽しみで、材料には春聯と兼用の「紅紙」が使われます。春節前に家々の大掃除が済んで、シャンと整えられた窯洞の内外に剪紙や春聯が貼られると、気分は一新! 冬枯れて黄色い大地一色となっていた村の景色は赤い絵の具が飛び散ったように、にわかには華やぎを取り戻します。剪紙の様々な図案や、紅紙の鮮やかな赤色は、吉祥祈願や魔よけの意味をもつとされ、特に窓花には来る年の干支や祈願にちなんだモチーフが選ばれます。

ところがこの剪紙、障子紙や台紙に一度貼ると剥がせず、強い黄土高原の陽光や風に晒されるとすぐに色褪せ、



剪紙が貼られたヤオトンの窓の障子はまるでステンドグラスだ

破れて朽ちゆく運命にあります。このため年越し準備の障子の張り替えに乗じて一年ごとに貼り替えられるのですが、実際ここに暮らしてみると、その脆さ、儚さがむしろ、一年ごとに貼り替えられて、新しいかたちとして再生する契機を生むのだと感ずるようになりました。“使い捨て”であることが、剪紙がこの地に永くあり続けることの鍵なのではないか——それはきっと、剪紙それ自体がモノや作品として価値があるからではなく、使われては消え、何度も生まれ変わること、その存在を忘れかけていた人々に思い起こさせ、“生きる”ことができるからだろうと思うのです。

### 剪紙の“使い方”

陝北人は古くから、紙に切り出されたかたちの力を信じ、祈りや願いを伝えるメディアとして活用してきました。例えば、結婚式をかざる剪紙シイホワ「喜花」はその代表格。式の当日は新居の外の窓や、寝床の壁、嫁入り道具、新郎新婦の契りの儀式で食される花饅頭等にべたべたと貼られ、窯洞の内外が男女の結び合いや多産を隠喩する多くの吉祥図案で埋め尽くされます。

写真の丸い剪紙は直径80センチくらいのビッグサイズで、新郎新婦の寝室の壁を飾る喜花の花形です。剪紙の種類としては「大団花」と呼ばれ、1枚の大きな「紅紙」を8

つに折り畳んで鋏を入れていく手法がつかわれています。

切り出された図案には、左右対称の4つの絵柄がぐるっと中心を囲むように並びます。このやり方は制作を簡略化できる一方、(通常的手法だと4～8枚ほど紙を重ねて切るため複製できるのに対して)1度に1枚しか切れない、つまり1点モノになるのが特徴です。そこで、この剪紙を新郎のご両親から依頼された劉小娟さんは、新郎新婦へのメッセージを込めて、世界にひとつだけの図案を切ってあげたと言います。

外縁の下の、角がある横を向いた動物は牛で、牛と向かい合う小さな動物は犬です。実は新婦の干支が牛で、新郎は戌年。小さな犬が大きな牛に巻かれているこの図案には、「結婚後、だんなさんが奥さんの尻にうまく敷かれて夫婦円満になるように」という、剪り手の劉さんの同姓びいきの願いが込められています。囍(双喜)の上の大きな花は、「石榴坐牡丹」と呼ばれ、牡丹が女を、石榴が男や多産を象徴します。男女結合・子孫繁栄を表す代表的な図案です。

牛の顔の下に潜り込んでいるのは魚で、中央に円状に並べられた栗のような形は蓮のつぼみ。この二つが合わさると「魚戯蓮」と言って、これまた男女結合の隠喩が込められます。「昔は十三、四歳でもお嫁に行ったからね。魚は男で蓮花は女。口で言わずとも、<sup>ホワ</sup>“花”を見りゃ子供だってやるべき

ことがわかるっていうわけさ」結婚式に参列したおばあさんたちは、そうカラカラと笑いながら、話してくれました。

こんな風に、陝北の剪紙のかたちには、絵解きのような面白さが詰まっています。おまけにその象徴的意味は、かたちに表されるだけでなく、儀式の中の唱え言葉や、会話中の常套句などと一緒になることで喚起されて、強いメッセージを放ちます。例えば、陝北の婚姻の中心儀礼「上頭」では、介添え人が集まった人々の面前で、背中合わせに座った新郎新婦の髪を櫛で交互に梳きながら、次のような唱え文句をリズムよく大声で投げかけます。「……娘産んだら器用に育て、石榴も牡丹も冒鉸できる……揃いの

胡桃、揃いの棗、男女の子供が揃いでオンドルを駆けっこ……」。その後、新郎新婦は、頭上から落とされた12対の胡桃と棗を大急ぎで拾い集めるのですが、胡桃と棗もまた、その形状や色から男女を暗示します。

また、中国語お得意の「諧音」(漢字の発音が同じか近い)によるかたちと複数の意味の重ね合いも多用されます。例えば、「<sup>mǎshàng fēng hóu</sup>馬上封猴」は馬に乗った猿の絵柄で、立身出世を表し、子どもがいる家に貼ってあるのをよく見かけます。「馬上」は「馬の上」と「すぐに」という意の語呂合わせで、「<sup>hóu</sup>侯」と「<sup>hóu</sup>猴(猿)」が同音になっています。しゃれが効いた、わたしも大好きな図柄です。

陝北の剪紙はこのように、かたちと言葉が何層にも響き合うことでイメージを喚起する、絶妙な仕組みの中に組み込まれています。かつての陝北では子どもの死亡率が高く、特に子沢山とその無事な成長、そして将来の幸福はすべての人々の切実な願いでした。そのメッセージを繰り返し思い起こし、皆で共有することはとても大切な剪紙の役目だった考えられます。

その他、民間療法的な儀式の中で、祈祷師や病人の親族が黄色い紙で<sup>ひとがた</sup>人形を切ってそこに病や厄を移して燃やし、抜けてしまった患者の魂を呼び戻す<sup>ひとがた</sup>など、特に人形の切り紙には不思議な力が宿るとされます。晴天を祈り、空を巡って雨雲を掃く女の子の姿をかたどった「掃天婆婆」(てるてる坊主)も切り紙です。秋雨が多い今の時期、

家々の庭先につりさげられます。また、ギシギシと鳴る木戸の音が気になる時には、紙を子どもの形に切って戸にぺたっと貼ると、音がピタッと止むと言います。これらの剪紙に切り出されたかたちは、人の思いや願いを具現化し、人々や神に伝える手紙のようなものなのかもしれません。

### 即興的に、剪紙をつくる

この地の方言では切り紙することを「<sup>ジャオホワ</sup>鉸花」と言い、字義通りには「美しいかたちを鋏で切る」ことを表します。ところが不可解なことに、自らが切った窓花を貼っているにも<sup>ジャオホワ</sup>かかわらず、女性たちの多くが「自分は鉸花できない」



大団花を剪る



剪って広げられた大団花

と語るのです。先ほど紹介した「娘産むなら……石榴も牡丹も冒鋏できる」という結婚儀礼の唱え文句に登場した「冒鋏」とは、直訳すれば「出し抜ける」という意味。これは手本や下絵なしに直接紙に鋏を入れて自在にかたち

を切り出す技術とされ、特に女性たちは、これと既存の絵柄を複製する作業（「替様子」とをはっきり区別していません。冒鋏できる名人は、想像力を発揮して思い描いたイメージを意のままに直接かたちにあらわせる、新たな図案の創作者とみなされます。これが出来てはじめて、胸を張って「鋏花できる」と言えるのです。

ところが実際のところ、<sup>マオジャオ</sup>冒鋏と<sup>ティヤンズ</sup>替様子<sup>ティヤンズ</sup>の境目はかなり曖昧です。替様子の場合、重ねた数枚の紅紙の一番上に型紙となる剪紙をのせて、上から針を指して穴を開け、紙縫りを通して全部を動かさないように固定してから、鋏を入れて複製していきます。もう少し上級者になると、既存の剪紙を手本に、見よう見まねで切る人もいます。いずれにしても、正確に元の手本を写し取るというよりも、むしろ切り手が自分なりにどうアレンジを加えるかによって、器用さや「創意」の有無が量られます。

もちろん子供やぶきっちょさんが切ると、いびつだったり、装飾が省略されたりするわけですが、剪り手たちはそんなことはお構いなしに、手本の剪紙と剪り上がった自作の剪紙と混ぜて貼ってしまうから驚きです。当然、下手な自作の方が残って次の型紙となる場合も多く、「オリジナルの剪紙を手本として大切に保管し続ける」という、それまでの私の常識は脆くも崩れ去りました。

このような剪紙のあり方は、この地の歌や詩が生まれる過程にも通じます。かつて識字率が極めて低かった頃、農村社会には文字を介さない豊かな音とかたちの世界が広がっていました。今でも陝北では、臨機応変に秧歌の歌詞を編んだり、酒の席でその時感じた喜びや感動の気持ちを対歌として唄い合う光景を目にします。

厳しい自然相手の農村生活。ここで共有された文化から詩的イメージを引き出し、即興で歌や剪紙として落とし込むことができる名人たちは、皆の羨望や尊敬を集める

存在です。もちろん、紙や音である以上、「もの」としてはやがて消えてゆきます。しかし彼らが生み出した言葉やかたちは、次々と他の村人によって模倣やアレンジされ、ときに世代を超えて伝えられていくのです。

多く切って残った剪紙、気に入った型紙としてとってある剪紙は通常、古雑誌や使い終わった子どもの教科書などの間に挟まれて、オンドルと敷布団の下や、収納箱のなかに保管されます。家を訪ねて「<sup>ヤンヤン</sup>“様様”（型紙）みせて！」と頼むと、女性たちは大切そうに取り出してきて、オンドルの上に並べてくれます。中には「この村にお嫁にきた20年前、実家から母の<sup>ヤンヤン</sup>“様様”を持ってきた」という年代物の型紙があったり、姑が最期に「何も残してやれないけど、これが私のすべてだ」と言ってかわいがっていた嫁にたくさんの剪紙を託した、といった話を聞くこともあります。

しかし、そのような古いと言われる剪紙でも、色褪せたりボロボロになっているものを私は見たことがありません。おそらく、私の目の前の剪紙は、好きだから、大切だからこそ、何度も繰り返し写され、模倣されたもの。当初の面影を残すくらいで、ずいぶんかたちに変化したのもあるかもしれません。

次の春節にも、女性たちが村の家の窓花を見て回り、お気に入りをもって型紙にする光景が見られることでしょう。こうやってひとつの

たちが、次の変奏を生むイメージの源泉となる……剪紙はこうして生きてきたし、これからも必要とされるかぎり生き続けていくと、私は信じています。

#### ★丹羽朋子（にわともこ）

東京大学大学院文化人類学研究室、博士課程在籍。中国・陝北地域の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一苾社図書工作室」のメンバーとして書籍や展覧会の企画に邁進中。

一苾社ウェブサイト(<http://yixinshe-books.jimdo.com/>)から、本エッセーのバックナンバーもダウンロード可能になりました。



「馬上封侯」



「掃天婆婆」(てるてる坊主)